

幼児の家庭における音楽活動の特徴

— 性差と年齢差を考慮して —

河野 久寿・内田 雄

(2021年3月1日受理)

Characteristics of Infant Music Activities at Home

— Considering Gender and Age Differences —

Hisatoshi Kawano · Yu Uchida

要旨：本研究は、性別および年齢の違いを踏まえた幼児の家庭内における音楽活動の実態調査を実施した。音を聴く活動は男女児ともにすべての学年で5割以上が実施していた。歌を歌う活動に関しては女兒ではすべての学年で高い実施率（50%以上）を示し、男児は学年が上がるにつれ実施率が低下する傾向があった。楽器演奏、音楽ゲーム、および音楽系の習い事活動に関しては男女児とも学年が上がるにつれ実施率が高くなる傾向、楽器演奏および音楽系の習い事に関しては女兒の方が、音楽ゲーム活動においては男児の方がいずれの学年においても実施率が高かった。音のでるおもちゃ活動は、学年があがるにつれ実施率が低下し、すべての学年で女兒の方が男児よりも高い実施率であることが分かった。

Key words：幼児 (Young children) 音楽活動 (Music activity) アンケート調査 (Questionnaire survey)

1. はじめに

我が国の義務教育において音楽・美術等の芸術科目の授業時限数が減少しているように¹⁾、昨今保育者養成校のみならず小中高校のいずれにおいて音楽教育の重要性が軽視されつつあるように感じられる。ほとんどの子どもが幼稚園や保育園または小学校などで歌う経験を多く積んでいるにもかかわらず、表現豊かで正確に歌えない子どもが多い。また、保育者養成校において保育者を目指す学生の多くが入学時点でピアノを弾けない、歌を歌えないことなどから鑑みても読み取れる事実である。このことは音楽に携わる時間の減少や、昨今“音楽は楽しく”という意識だけが先行し、音楽の必要性や音楽教育の意義が広く認識されていないことによるものではないかと考えるものである。

音楽が幼児にもたらすメリットは多く報告されている。その一つに挙げられるのが言語能力の促進である。米科学アカデミー紀要論文による最新の研究

結果として、「赤ちゃんの遊びに音楽の要素を取り入れることは言語能力習得の一助となる可能性があり、早い時期に音楽的な体験を取り入れると、認知能力により広範囲な影響を与える可能性があることを意味している」²⁾としている。音楽の早期教育についての提唱者であるハンガリーの音楽教育者コダーイ（1882-1967）においては、「音楽教育は生まれる9ヶ月前から始めよ」と所謂お腹の中にいるときから既に始まっていると説くが³⁾、現代において音楽が人間社会の中で効果的役割を果たすためには、子どもが音楽に携わる時間を増やしその質を高め、教育者の立場としては、どのような意義がありなぜ重要であるのかを再確認する必要があるのではないかと考える。

子どもは園や学校で様々な音楽活動を実施している。例えば、先生が歌った歌やCDなどの音楽を聴く、わらべうたや季節の歌を歌う、手遊び、簡単な打楽器・鍵盤楽器を鳴らして音を楽しむ、合奏・合唱

する、音楽を聴いて体を動かすなどが挙げられる。音楽に携わる時間を増やすためには、園や学校での音楽活動の他に自宅での日常における音楽活動が重要である。家庭における音楽活動では、知っている歌を歌う、テレビの音楽教育番組を視聴する、CDやYouTube動画で好きな曲を聴く、ピアノやキーボードなどの楽器を弾く、スマホ音楽アプリで遊ぶ、音の出るおもちゃで遊ぶ、音楽に合わせて踊るなどが考えられる。特に、現代における幼児の音楽活動の特徴としては、音の出るおもちゃやスマートフォンに関するアプリまたは動画、ゲームなど現代ならではのツールを使用したものが挙げられるだろう。これらは幼児にとっても興味を惹くものであり、格好の遊び道具となっていると考えられる。ただこれらの物は、幼児教育の現場では勿論使用されるものではないと考えるが、家庭における活動の中では多くの機会が使われ当然幼児に多大な影響を与えるのではないかと推測される。

園や学校での音楽活動はクラス単位などで実施されることも多く、性別にかかわらず比較的均等に音楽に触れる機会が与えられる。一方、家庭での音楽活動は個人差が大きく、性別の違いによる幼児の嗜好の違いも音楽に触れる機会を変化させる。Todd et al. (2017) は、幼児のおもちゃの好みに関する16の研究のメタ解析を実施し、男児・女児ともにそれぞれの性別に合ったタイプのおもちゃで好んで遊ぶ傾向にあり、男児においてその傾向は年齢を重ねるにつれ強くなることを報告している⁴⁾。幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書(ベネッセ,2013)によると、幼児は年齢を重ねるにつれ楽器演奏の習い事をする割合が高くなり、幼児期全体で見ると女児(16.2%)が男児(4.3%)よりも高い割合で実施していることが報告されている⁵⁾。以上のように幼児における遊びの傾向や習い事には性差や年齢差があることが明らかであり、各家庭内における音楽活動も性別や年齢の影響を受けると推察される。

前述したとおり、幼少期から音楽に触れる機会をいかに確保するかは、その成長にとって重要な要素の1つであろう。また、園や学校での音楽活動に限らず各家庭内でいかに音楽に触れる機会を得られる

かを考える必要がある。本研究は、性別および年齢の違いを踏まえて幼児の家庭内における音楽活動の実態を把握することを目的とした。

2. 方法

本研究では、北陸地方の幼稚園1園を対象に家庭における音楽活動調査を実施した。

(1) 調査対象者

163名の園児(年少49名、年中64名、年長50名、女児94名;男児69名)の保護者を対象に家庭における音楽活動調査を実施した。本調査の目的、実施方法等に関しては書面にて説明し、参加に同意を得られ他調査対象者106名(年少34名、年中41名、年長31名;女児65名、男児41名)から回答を得た。(回収率65.4%)本調査は無記名式で実施された。

(2) 調査内容

調査対象者の幼児の属性に関する項目として、学年(年少、年中、年長)、および性別(男児、女児)を調査した。

また、家庭内での音楽活動として、音楽を聴く活動、歌を歌う活動、歌を伴う手遊び活動、楽器を演奏する活動、音楽ゲーム活動の、音の出るおもちゃを利用した遊びの有無、音楽系の習い事の有無の7つの活動の実施有無を調査した。

(3) 解析方法

家庭内での音楽活動の実施状況に関する各項目(全7項目)に関して活動の実施有無を性別および学年でクロス集計した。また、各項目で実施していると回答した割合を男女別および学年別に算出した。

3. 結果

図1-1から図1-7は家庭内での各種音楽活動(聴く、歌う、手遊び、楽器演奏、音楽ゲーム、音の出るおもちゃ、音楽系の習い事)を実施している割合を男女別、学年(年少、年中、年長)別に集計した結果を示している。

音を聴く活動は男女児ともにすべての学年で5割以上の幼児が実施しており（図1-1）、各種音楽活動の中でもっとも実施率が高い活動であった。歌を歌う活動に関して女児はすべての学年で高い実施率（50%以上）を示しているが、男児は学年が

上がるにつれ実施率が低下する傾向が見て取れる（図1-2）。

楽器演奏、音楽ゲーム、および音楽系の習い事活動に関しては男女児とも学年が上がるにつれ実施率が高くなる傾向があった（図1-4、図1-5、

表1-1 家庭内で各音楽活動を実施している割合(1)

	聴く活動			歌う活動			手遊び			楽器演奏		
	年少	年中	年長	年少	年中	年長	年少	年中	年長	年少	年中	年長
女児	81.0%	76.0%	89.5%	57.1%	68.0%	68.4%	66.7%	36.0%	52.6%	38.1%	48.0%	63.2%
男児	76.9%	56.3%	75.0%	76.9%	56.3%	41.7%	53.8%	56.3%	25.0%	30.8%	37.5%	41.7%
全体	79.4%	68.3%	83.9%	64.7%	63.4%	58.1%	61.8%	43.9%	41.9%	35.3%	43.9%	54.8%

表1-2 家庭内で各音楽活動を実施している割合(2)

	ゲーム			おもちゃ			習い事		
	年少	年中	年長	年少	年中	年長	年少	年中	年長
女児	4.8%	12.0%	15.8%	71.4%	44.0%	26.3%	23.8%	24.0%	42.1%
男児	7.7%	18.8%	41.7%	46.2%	25.0%	8.3%	7.7%	12.5%	16.7%
全体	5.9%	14.6%	25.8%	61.8%	36.6%	19.4%	17.6%	19.5%	32.3%

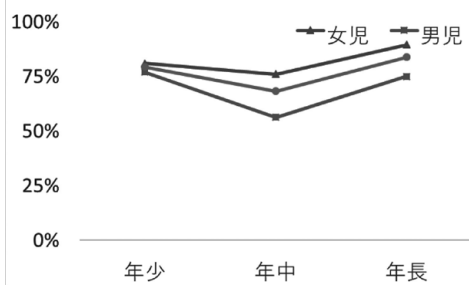


図1-1 聴く活動を実施している割合

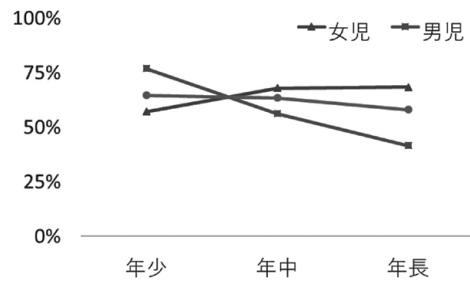


図1-2 歌う活動を実施している割合

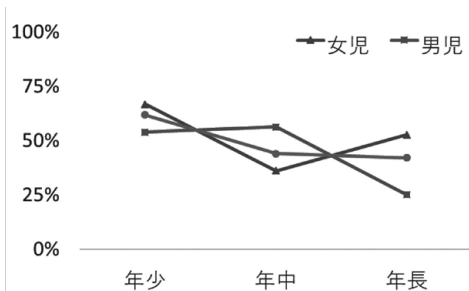


図1-3 音楽を伴う手遊び活動を実施している割合

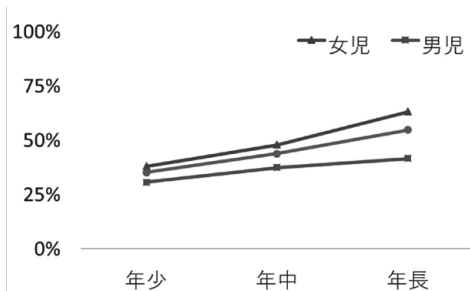


図1-4 楽器演奏を実施している割合

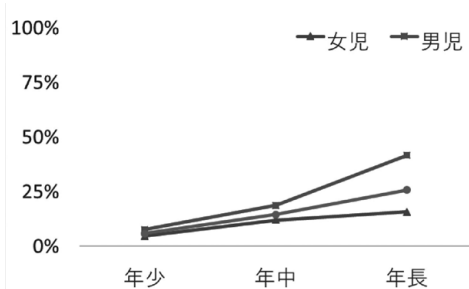


図1-5 音楽ゲーム活動を実施している割合

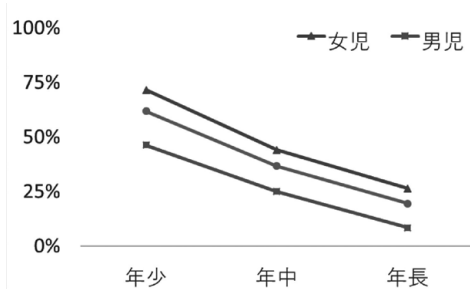


図1-6 音となるおもちゃで遊んでいる割合

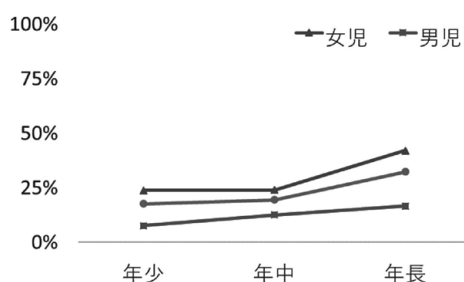


図1-7 音楽系の習い事をしている割合

図1-7)。また、楽器演奏および音楽系の習い事に関しては女兒の方が、音楽ゲーム活動においては男兒の方がいずれの学年においても高い実施率を示していた。

音の出るおもちゃ活動は、学年があがるにつれ実施率が低下していた(図1-6)。また、すべての学年で女兒の方が男兒よりも高い実施率を示していた。

4. 考察

本研究は、子どもの自宅における音楽活動を性差と年齢差を考慮して分析し、その特徴を明らかにするものである。

“音を聴く”活動は、女兒男兒総合で全学年約7.8割とかなりの割合で実施され、女兒の方がどの年齢においても実施率が高い傾向にあった。“音楽を聴く”ことに関して、その重要性をマーセル(1893-1963)は、「鑑賞」は音楽教育の基礎であり「愛好する心情を喚起させ、音楽をより深く、より懸命に育んでいく音楽教育の推進力である」⁶⁾述べている。現行小学校学習指導要領「音楽」(2017改訂・2018実施)においても「鑑賞」は「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」⁷⁾とあり、「鑑賞」は音楽活動の基盤で、その表現の学習に密接に関わりを持つことが示されている。保育者養成課程に在籍する大学生(350名)に幼児期の音楽環境についての調査(1996~2000)を実施したところ、最初の音楽経験として覚えていたのは「歌を聞いたこと、歌ってくれるのを聞いたこと」が51%で「楽器の音を聞いたこと」、「歌ったこと」、「弾いたこと」よりも多いと報告されている⁸⁾。このことは幼い時に先

生や両親など身近な人が歌って聞かせるものが記憶として1番印象に残り、人的環境が影響することも示している。ジョン・ケージ、武満徹らは、現代人は耳の感受性が衰え、聴くことに怠惰になっていると警鐘を鳴らしているが⁹⁾、“音を聴く”行為も、音から読み解く上で人間としての本来伸ばすべき能力であり、社会での営みの上で重要な役割を果たす。現行の幼稚園教育要領(2017改訂・2018実施)における感性と表現における領域「表現」では「風の音や雨の音、身近にあるくさや花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」¹⁰⁾が留意することとして具体的に示され、子どもの“音を聴く”行為の重要性を印象付けている。幼児にとって“聴く”活動は、日常生活の中で様々な音に気付くことが大事であるが、それらに心を動かされ楽しむような、音による気づきの豊かな環境も必要であろう。幼児の音感受の実際を観察してみると、身のまわりの音を正確に擬音化する、音の動きの方向性を感じる、微細な音質の違いをとらえる、自分が作り出す音を聴く、音を想像するなど、幼児が身のまわりの音を感受して遊んでいることが確認されている¹¹⁾。以上のように“音を聴く”ことは、表現に繋がる非常に重要な役割を果たすものであり、ただ聴くのではなく、教育現場では様々な音楽や音の聴き方を教授することも大事なことであろう。結果として男女児ともに音を聴く活動の実施率が高く、家庭において何らかしらの聴く活動が行われていることが明らかになった。ただし男兒が女兒と比較してその割合が低かったことも分かった。

“歌う”活動は、女兒男兒総合してみると全学年約6割で実施されているが、男兒は年齢が高くなるにつれ歌わなくなる傾向が見て取れる。年少こそ男兒の方が実施率は高いが、年中年長では女兒の方が実施率は高い傾向にあった。日本の音楽教育は明治時代より歌うことを中心とした唱歌教育が行われ、第二次世界対戦直後までそれは続いた。歌は教師から子どもに口伝で教えられるため、教師の歌をよく聴いて覚えなければ歌うことができない。聴く・覚える・歌うを繰り返すことで、聴覚や記憶力、歌唱力(表現力)、言語能力を養っていく。歌うこ

とを重視する日本の音楽教育の流れは現代でも息づいている。現代の音楽教育にも影響を与える音楽教育者コダーイも、子どもの音楽的活動の最初は歌うことと考え、歌唱・ソルフェージュ・音楽聴収を取り入れた音楽教育を行なった。このように幼少期から歌う活動は、その繰り返しにより表現力の向上のみならず様々な能力の向上に繋がるものであり、我が国の音楽教育において長い間重視されてきたことが家庭での歌う活動の実施率の高さに繋がっているのだろう。ただし、ここでも男児が女児と比べ実施率が低い傾向であり、男児の実施率向上に何らかの対策が必要であろう。

その他の音楽活動で楽器演奏・ゲーム・おもちゃ・習い事などにも男女の実施率が異なり、ゲーム以外は女児の実施率が高い傾向にあった。また、おもちゃに関しては、年齢が高くなる毎にその数値は減少し、逆にゲームは年齢が高くなるにつれ実施率が高く、知能や理解力の向上と共におもちゃからゲームへ以降する幼児もいることが推測される。

楽器演奏と習い事について特に年長児は、女児の方が明確に高い実施率を示した。前述した各種音楽活動の実施率の結果を踏まえても、女児の方が音楽活動を活発に行う傾向があると言えよう。女児の方が男児よりも音楽活動が活発であるという結果は、女児の嗜好として音楽活動を好む傾向や、ジェンダーの影響があるかもしれない。逆に男児が女児に比べなぜ音楽活動を行わないのかという疑問も湧いてくる。いずれにせよ、幼児期からの音楽教育を考える上で、男児が家庭でも積極的に音楽活動を実施したくなるような取り組みが必要になるかもしれない。

本研究では幼児の家庭における音楽活動の調査を行ったが、現代の取り巻く音楽環境は、以前よりデジタル機器やICTの発達により豊かなものになっていると言えよう。かつては聴きたい音楽を入手するためにはレコード・カセットテープ・CDなどを購入したりラジオを録音して聴く時代もあったが、現代においては、無料で聴けるYouTubeであったり、有料であっても聴き放題が用意されていたりと、インターネットで検索をかけるだけで聴きたい曲や観たい動画が視聴できる時代である。そのような環

境の変化は、今後子どもたちが成長した後に様々な音楽的質の変化をもたらすのではないかと推測する。

本研究は北陸地方の幼稚園1園を対象に調査を実施した。今後他の園や地域の調査の範囲を広げ、最終的には幼児の音楽活動の活性化へと繋げて参りたい。

引用・参考文献

- 1) 天笠茂 (2020)「標準授業時数のあり方について」文部科学省 教育課程部会
- 2) Zhao, T. C., & Kuhl, P. K. (2016). Musical intervention enhances infants' neural processing of temporal structure in music and speech. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 113 (19), 5212-5217
- 3) 中川弘一郎編・訳 (1980)「コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践～生きた音楽の共有をめざして～」全音楽譜出版社, 151
- 4) Todd et al. Todd BK., Fischer RA., Di Costa S., Roestorf A., Harbour K, Hardiman P, Barry JA. (2017) Sex differences in children's toy preferences: A systematic review, meta-regression, and meta-analysis. *Infant and Child development*, 27 (2), e2064.
- 5) ベネッセ次世代育成研究所 (2013)「第1回幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書」基本集計表：幼児期版https://berd.benesse.jp/jisedaiken/research/research_22/pdf/research22-10.pdf (2021年3月1日閲覧)
- 6) マーセルJ.L.著 美田節子訳 (1971)「音楽的成長のための教育」音楽之友社.
- 7) 文部科学省 (2017)「小学校学習指導要領解説 音楽編」
- 8) 中村千晶 (2018)「幼児の音楽表現と聴く活動について—同時に発達上の効果を伴う—」関西学院大学教育学論究第10号, 109-117
- 9) 武満徹 (1987)「すべての因襲から逃れるために：武満徹対談集」音楽之友社
- 10) 文部科学省 (2017)「幼稚園教育要領」
- 11) 吉永早苗 (2012)「幼児期における音感受教育 —モノの音・人の声に対する感受の状況と指導法の検討—」白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程学位論文
- 12) 株式会社バンダイ (2018)「子どもの習い事に関する意識調査」<https://www.bandai.co.jp/kodomo/pdf/question252.pdf> (2021年3月1日閲覧)
- 13) ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ；神原雅之・難波正 明・里村生英・渡邊均・吉永早苗共訳 (1999)「音楽的成長と発達—誕生から6歳まで—」溪水社
- 14) 株式会社バンダイ (2018)「小中学生の“遊び”に関する意識調査」<https://www.bandai.co.jp/kodomo/pdf/question243.pdf> (2021年3月1日閲覧)
- 15) 渡辺恭子・上田礼子 (1979)「乳幼児期における行動発達に関与する因子の検討—性差について—」民族衛生 第45巻 第5号, 197-203